

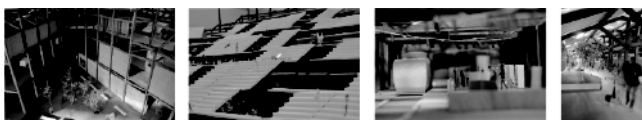
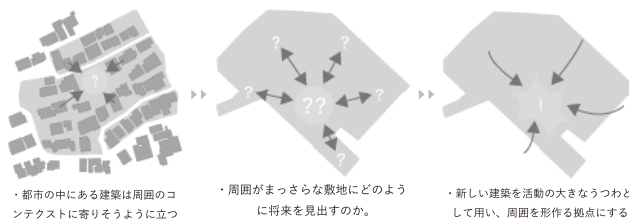


交通を抱きながら周囲と連続するフレームのスタジアム

オリンピックはかつて都市オリンピアで開催された身体躍動の祭典であった。周辺各国は争いを中断してまでその国の力自慢をオリンピアに送り、神々への奉納として競わせた。期間中、連日連夜 人々は熱狂し街道は華やぎ、都市は人の渦に飲み込まれた。

今、経済効果への期待に終始してきた近代オリンピックのあり方が転換期を迎えている。オリンピックは今でも人類の祭典であり世界の関心を引くものである。この祭典を新しい都市の機能として迎え、都市全体がかつてのオリンピアのように人の渦にのまれる熱狂の地をつくれるのではないだろうか。

活動の器としての建築を考える



SECTION DIAGRAM



・RCで造られるスタジアムのメガストラクチャーは壁く不明な空間を造り、内外を大きく二分する。

・部材を細くし数を増やすことでスタジアムのバックヤード空間を細分化する
・高度を小さくしオリピック後は部分的に高度を取り外せるようにする

・小さく分割された空間に様々なプログラムを挿入し、それが展開される状態をつくることで小さな活動が様々な空間を成す
・交通インフラが貫入し、人との頻りに交わるホットスポットをつくる



設計主旨 concept

横浜を横断する新しい都市体験の中心地となる、祝祭的な都市空間を提案します。
新しい都市機能としてスタジアムの持つ祝祭性を組み込みながら、そのバックヤードを小さく分節し、日常の舞台として解放します。交通が建築内を貫入し、人とものが多量に行き交う巨大なガレージのような建築を新しい都市のインフラとして機能させることで、様々な活動がこの建築に集約され衝突と連続を産みながら、建築それ自体が都市のようにうごめくことで、横浜の新しい中心を創造します。

皆が関心を持ちながら踏み込めないオリンピックスタジアムという課題に果敢にも挑戦したという点、さらにその提案が横浜の抱える問題をも重ねつつ未来に向けた力強い提案だったという点で高く評価した。スタジアムはオリンピック開催後、切り離されたオリンピック跡地ではなくスタジアムの巨大な架構を利用した一つの街のように変化していく。架構の中をインフラが走り、様々な場所が自然発生的に出来上がっていく。今までの議論で否とされていた巨大さ、その巨大な廃墟が潜在的に持つポテンシャルを引き出す魅力的な提案であった。
(講評 永山祐子)